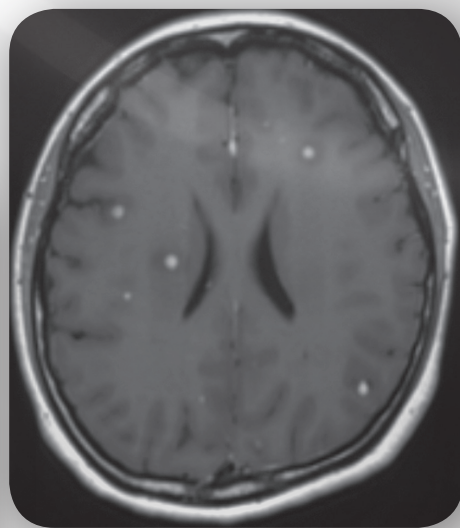
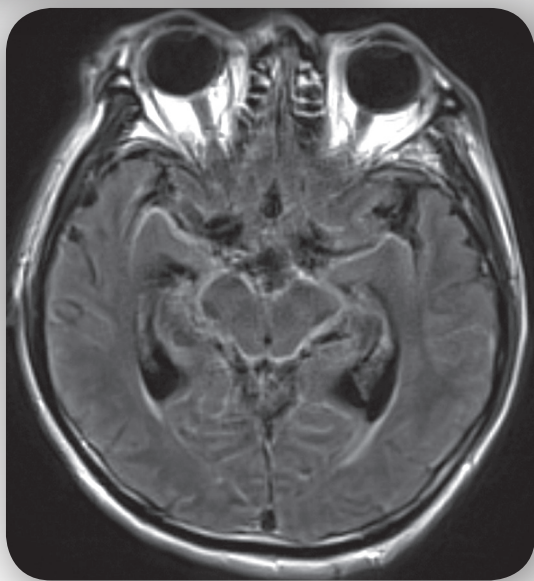
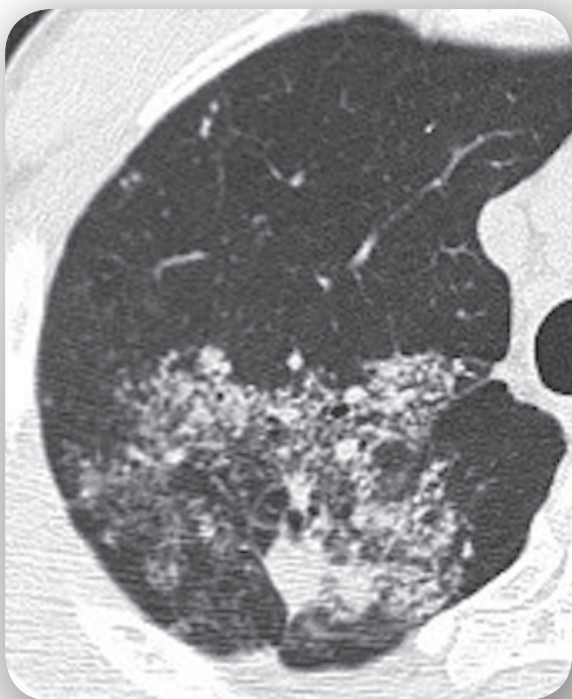


特 集

結核の画像診断



(写真：p.492, 507より)

序説

かつて猛威を振っていた結核はすでに過去のこととされる傾向にあるが、実は日本では平成30年度の罹患率は人口10万人当たり12.3、新登録結核患者数は15,590人と世界では中蔓延国に位置している。ほとんどの先進国は人口10万人当たり10以下の低蔓延国なのに対して、日本はいまだ中蔓延国なのである。日本の結核病床は190医療機関(3,800床)で、病院も集約されてはいるが、近年ネットカフェや漫画喫茶などを利用する大都市の若者、就労目的で来日する外国人、施設入所の高齢者などの結核発症が目立っており、日常診療で遭遇する機会也多岐多様化している。

この序説を記している時点では、新型コロナウイルスが世界的に大流行している。2020年3月26日午前4時現在で世界の感染者44万7,030人あまり、死者2万599人と報道(AFP通信)され、世の中の政治経済、文化やスポーツ活動などあらゆる分野でさまざまな影響が出ている。世界中の人々が感染症の怖さを身をもって実感し、一日も早い収束が切望される最中である。

治療法が確立しているとはいえ強力な感染力をもつ結核を正しく早く診断することは、患者1人のみならず周囲で生活する多くの人々の感染・発病の危険を回避するという大きな社会的意義をもつと考えられ、今一度結核の診断に目を向けていただければ幸いである。

本特集では、画像診断に関しては肺結核(西本優子先生ら)、肺外結核(竹内 均先生ら)、免疫不全患者の肺結核(楊川哲代先生)、肺結核治療経過(黒崎敦子ら)、を取り上げて、それぞれの先生に解説いただいた。また、医療機関における結核患者の取り扱いを加藤誠也先生、肺結核最新の治療を吉山 崇先生に丁寧に解説していただいたので、画像診断のみならず日々の診療上で役立てていただければ幸いである。

黒崎敦子